

しかし、それと同時に、経済開発だけが地域開発のほとんど唯一の課題とされた時代がもはや過去のものとなったことも、時代の大きな流れとして卒直に受け止めなければならない。県が行なった県民意識調査においても、「住みよい生活環境や福祉施設を整えるため、社会開発を進めた方がよい」と考える人々が、所得向上のための経済開発を希望する者よりも多くなっており、地域開発に対する意識の変化が生じている。

地域開発は、もともと住民福祉の向上を究極の目的としており、住民福祉の基礎に経済の発展や所得の増大があることは否定できないが、それがすべてではない。本県の県民一人当たり所得は、現在全国平均の六十五％の水準にあるが、県民意識調査では多くの県民が「自然環境がよい」「人情や気風がいい」という理由をあげて、本県を住みよいところだと答えており、所得統計ではあらわせない、いろいろな要素が、人々の価値判断に取り入れられている。

人間が生きがいのある生活を送るためには、住む、働く、学ぶ、遊ぶといった四つの側面が重要であり、「人間」を中心に置き、人間生活のあらゆる側面にそれぞれの価値を認め、尊重していくという考え方が必要である。これからの県政は、そのような意味での人間尊重、生活優先の理念に立脚し、県政のあらゆる分野について、この理念による見直しを

行ない、その浸透をはかっていくことが課題となる。

## ■新しい時代の新しい熊本と熊本人

まず経済開発についてみれば、その地域開発における重要度は依然として否定できないとしても、生産の場が働く人々にとっても生活の安全性と快適性を奪うものであってはならないことは言うまでもないことである。そのような意味で、今後は性急に生産や所得の目さきの増大を追い求めるのではなく、職場と生活の環境整備や自然の保護に留意しながら、住民福祉と調和のとれた形で、最終的に地域に役立つ、より長い眼での経済的な成果を期待すべきである。特に工業開発については、工業再配置の気運の中で、積極的ではあっても、あくまで公害がなく、しかも住民の所得を高め、関連産業への波及効果の大きい企業の選択的な導入の方針を堅持する必要がある。さらに、人々が生きていくための基礎条件としての美しくしかも安全な郷土づくり、社会福祉の充実と健康の増進、また人々が学びかつ遊ぶための生涯教育や健全なレクリエーション活動の推進と芸術文化の振興にも、従来以上の重点を置き、きめこまかな配慮がなされなければならない。われわれはいまや、職業選択の面でも住宅、医療、福祉、安全など居住条件の

面でも、教育、文化、教養など精神的な面でも、あるいはまたレジャーやレクリエーションのような楽しみ面の面でも、多様な選択機会を持つ開かれた社会に到達しようとしている。物質的な豊かさが求められると同時に、精神的な充実が期待され、自然と人間の関係について根元的な意味が改めて問い直される時代になっている。また、交通運輸機能の向上と情報システムの拡充によって、国民生活の交流関係は都市と都市、都市と農村を結んで緊密化し、生活の圏域は急速に広域化しつつある。国際的には、対決の時代から「対話と友好」の時代に移行し、国際交流の波が全世界に及ぼうとしている。

## 県政運営の基本構想

### 1 新しい熊本の建設構図

熊本県は面積七千三百八十三㎢、現在百六十八万人の人口を有している。九州のほぼ中央に位置し、東部は阿蘇および球磨の高原山地が九州脊梁山地の一部を形成している。菊池川、白川、緑川、球磨川などの主な河川は、これらの高地に発して西流し、有明海、八代海に注いでいる。また、筑後川、五ヶ瀬川、大淀川などもこれらの高地にその源を発している。

中央部は、海沿いに北から玉名平野、熊本平野、八代平野がひろげ、南部は芦

る。われわれは、こうした時代の変化、社会の潮流を冷静に受けとめ、むしろ積極的に主体性をもって受け入れ活用することによって、新しい時代の新しい熊本と熊本人をつくりあげなければならない。

人間尊重・生活優先の理念に立脚し、県民生活と地域開発の調和をめざした県政の積極的な推進によって、安全で健康にくらせる社会、所得ができるだけ多く住みやすい社会、快適で生活に張りのある社会、このような本県の意味で豊かな住みよい社会を、県民総参加で築く必要がある。

民の要望も次第に高度化し、かつ多様化する方向にある。

物質的にも精神的にも一層充実した「豊かな社会」を求める人間の欲求は、長い眼でみた場合、発展へのたくましいエネルギーの表出として否定することはできないであろう。殊に所得水準をはじめ、いろいろな点で全国の水準より遅れた面を持つ本県では、長期的な視点に立って、交通通信施設の整備や水資源の開発など、今後の産業と生活のための基盤を整備していく必要がある。

そのため、九州縦貫自動車道、九州新幹線をはじめ、空港、航空路の拡充など、高速交通網の整備につとめるとともに、新規の港湾として熊本港の建設をはか

北の山地が海に迫ってリアス式の海岸となっている。その内陸部、各河川の中上流には、菊池盆地、阿蘇谷、南郷谷、矢部郷、人吉盆地などのほか、肥後合地などの広々とした地形が展開している。さらに西南海上には、宇土半島を経て天草島が連なり、外海に面している。

本県の土地利用は、これらの自然条件に加えて、道路、鉄道、港湾、空港などの交通網、およびそれぞれの生活圏において中心的な役割を果たしている都市の配置によって、骨格となる部分が形成さ

る。これら新ネットワークの整備とあわせて、既存の交通施設、情報通信網の整備につとめ、これを基幹として日常生活圏の広域化に即応した広域市町村圏の施設整備を計画的に推進する。特に、県下全市町村の半数以上を占める過疎市町村に対しては、基本的には広域の生活圏の中で中心都市や他の町村との関係を深めながら、地域の特性を生かした産業の振興と生活環境の整備をはかり、地域間の均衡ある発展につとめる。

なお、今後、魅力ある地域社会を形成していくに当って、施設整備と並んで重要なのは、地域づくりにおける住民参加の精神である。県は市町村と協力して、地域の住民との対話をさかんにし、地域の連帯感を高めるような参加意識の高揚をはかり、新しいコミュニティの創出につとめるものとする。

### (2) 快適で安全な環境の造成

一九六〇年代のわが国は、物的生産の増大に重点を置いた性急な開発によって高い成長を遂げたが、その反面、公害や自然破壊による環境の悪化、社会資本投資の不足による住宅、上水道、下水道など生活環境施設の遅れ、あるいは交通災害や自然災害の多発など、生活の快適性と安全性の確保に大きな不安をいだかせるに至った。本県においては、経済開発の遅れもあって、環境の悪化は先進工業

れている。その大きな流れのひとつは南北に貫く軸であり、国道三号、鹿児島本線、肥薩線などの既存交通網のほか、九州縦貫自動車道、九州新幹線などの新ネットワークによって域外と結ばれ、産業と人口集積の大きい都市軸を形成する動きにある。もうひとつの大きな流れは東西の軸である。この地域は、九州広域観光ルートの要地である阿蘇および天草の国立公園を擁し、道路、鉄道などの整備に加えて、今後、横断の高速道路や九州四国新幹線など新ネットワークの形成を推進することによって、自然環境に恵まれたレクリエーション軸としての発展が期待される。

本県の開発は、このX型に交差するふたつの流れを軸として、面的にはまず農業が大きな割合を占めている。農業においては県下を二十一の農業地帯に区分し、生産から流通まで一貫した広域的農業団地の形成をはかる。林業は球磨、阿蘇およびそれをつなぐ脊梁山地を中心とし、水産業については栽培漁業など沿岸の高度利用をはかるものとする。工業は有明、八代などにおける臨海立地に加えて、内陸部にインダストリアル・パークの展開をすすめるほか、農村地域に適切な工業の導入をはかり、地域経済の要請に密着した公害のない工業団地の造成につとめる。

また、県下には現在、九つの広域市町村圏が設定され、それぞれ計画を策定し

### (1) 豊かな社会への基盤づくり

戦後二十五年余の努力によってわれわれが築きあげた社会は、公害や過密過疎、社会資本の不足などいろいろの問題はあるにしても、戦後の荒廃の時期と比べると大きな生活水準の向上をもたらし、それにともなう、県政に対する住

